

建武中興と智識階級特に社寺

法政大學教授
文學士

星野 日子四郎

本文は本會研究所員たる故星野日子四郎氏が昭和九年二月十八日に於ける本會例会(二〇六回)に講演せられた口述筆記の大意である。今也斯人亡し。噫(文責、溝口駒造)

私は耶蘇教に所謂る三位一體で日本思想が出来てゐると考へる。敬神・愛國・尊王と此の三つは、互に切つても切れぬ關係を成してゐるが、之が我が日本國民思想の第一義であつて、古代に發源した日本固有の斯かる精神を持ち續けると共に絶えず外來良質の新文化を取り入れて之を合理的に消化してゆく所に日本民族の大特色が存するのである。固より我が國體は世界萬國に其比を見ない所で、天壤無窮の神勅を基として、猛火も燒くことを得なかつた萬世一系の御血統が今日に榮えてゐるのは大日本の誇であるが、而も古來決して漫然たる排外の態度に出た事はない。既に神代に於ても素盞鳴尊は、日本に浮寶の必要を感じて韓國から持ち歸つた樹種を紀國に殖ゑられ、又、韓鋤劒即ち朝鮮製の劒を以て八岐大

蛇を斬つて天叢雲の寶劍を獲させ給うた。斯う云ふ風に外國のもので良質のもの、物質たると思ふたるとを問はず、取つて日本化して利用するのが我民族の特長である。

後醍醐天皇は此の事を最もよく御理解あつて、而も御實行あらせられた御方である。建武中興其のものは大きな成果を結び得なかつたが、其の源から溢れて流れる水は、盡さずしてなほ今日に生きてゐる。殊に有名な三房の一人北畠親房は御遺旨を奉じて南朝の柱石となり、神皇正統記を著して後代に大きな影響を與へてゐる。此の後醍醐天皇の遊ばされた事は、大體に於て御父後宇多天皇の御遺旨を繼がせられたものであるが、殊に其の著しいのは神祇の御崇敬である。後宇多天皇は萬里小路宣房の献言を納れて、年初に百般の庶政に先んじて神事の政を聞召されたが、後醍醐天皇は一たび六波羅に捕はれて、北條氏から御法體にとの勸説に遭はせ給うた時にも斷然之を拒んで、毎朝御行水を召し、大神宮を御拜遊ばされた。又逆賊北條遂に亡滅して、再び還幸の御時にも、鳳輦なほ未だ京地に入らせ給はぬ以前に、薩摩國府の新田八幡社からの執達に基き、先づ神政を治めさせ給うた。これは遺臣北畠親房の著書に現れてゐる「大日本は神國也」の思想の御實現である。

斯の如く天皇は神祇御崇敬の念が篤かつたが、それと共に又、佛教の御信仰も深かつた。決して他國の教である爲に之を御排斥は成さらなかつた。茲に後醍醐天皇の偉い所がある。天皇は決して社寺の

勢力を利用すると云ふやうな小さな思召はなかつた、建武中興に近畿の大社寺が多く忠志を運んだのも半は天皇佛教御信仰の爲である。反對に承久の役に後鳥羽上皇の皇權恢復の御企が失敗に了つたのは、此の寺院方面の援護が無かつたからであつて、戦争が開始された後に成つて御祈禱などを行はせ給うたが、それでは効のある筈も無かつた。即ちこゝに建武中興の成功と承久の失敗との注意すべき對照が見られるのである。

元來社寺は屢々武人の横領を被つて、武家政治には少からぬ怨を持つてゐる。其處へ朝廷からの御催促があつたので、寧ろ進んで勤王運動に呼び込まれた。尤も各地の天台寺院へ行幸御幸ある事は、後宇多天皇の時代からあつたが、後醍醐天皇は、天台宗では比叡山延曆寺へ大塔宮を座主として送らせ給うた外、元徳二年三月二十六日には聖駕叡岳に幸して法縁を結ばせ給ひ、別に又、三井寺園城寺へは寺領を寄附し、次いで笠置寺へも行幸あつた。山伏修験道との關係は此の時の笠置行幸から生じたのであつて後に伯耆の大山、船上山、熊野三山、吉野山などの連中が、兵を擧げて應じ奉つたのも之が爲である。殊に吉野や熊野は可なり後に至るまでも南朝のための本據地であつた。

斯の如く社寺關係の人々が天皇の御方に馳せ參じたと云ふ事は、確に建武中興の事業に堅固な支柱を與へたものであつた。當時北條氏は武力を以て天下を制してゐたに相違ないが、その武力を組成する個

々の武人は、殆ど論ずるに足るものでなかつた。これは後の話であるが、曆應五年九月三日は伏見院の御忌日に當つたので、持明院上皇が伏見の離宮へ御幸遊ばされ、夜に入つて還御の道すがら、五條あたりで土岐彈正少弼頼遠が騎馬で兵士を従へ泥酔して歸つて來るとお出會ひになつた。供奉の者が無禮を叱つて下馬を命令したが、武威に傲つてゐる頼遠は命に應じないので、再び聲を高くして「院の御幸にてあるぞ、下馬せよ」と命ずると、泥酔した頼遠はカラカラと笑つて「何、犬といふか、犬ならば射て落さん」と云ふ儘に院の御車に無禮を働き、事後に漸く覺つて夢窓國師に命乞を頼んだが、斯かる不法の罪を宥される筈はなく、終に首を刎ねられたと太平記に出てゐる。斯ういふ愚物が武士には多かつたのである。之に反して社寺の人々は、當時の知識階級の代表者であつて、大義名分の何たるかを心得てゐた。だから殊に御歸依の深い天皇からの御催促があると欣び進んで之に應じ、朝廷のために犬馬の力を致したのである。何にしても後醍醐天皇が當時の知識階級殊に社寺方面と御結托になつたのは建武中興の大なる力であつたと申さねばならぬ。

只、建武中興の實行期に入つて、民力休養の要があつた時、不測の争ひから大塔宮を鎌倉へお流しに成つたのは遺憾な事で、爲に官軍の威望が衰へたのが即天下大亂の因となつたが、これは時の勢ひであつたらう。私は建武中興の御事業を回顧して今更に後醍醐天皇の御英明を偲び奉るものである。